

国際理解教育と CISV

岩崎統子



第2次世界大戦終了から5年後の1950年に、ユネスコは国際理解を促進する計画を発表したが、日本で国際理解教育が大きな課題とされるようになるには、その後、長い年月が必要だった。私は学生時代からCISV (Children's International Summer Villages) に関係し、勤務校で英語を教え、国際交流を担当してきたので、この事の推移に終始関心を抱き続けてきた。

それは1987年のこと、臨時教育審議会が最終答申で、「新しい国際化に対応できる教育の実現を期することは、わが国の存立と発展にかかわる重要な課題である」と述べ、教育過程審議会も「国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視する」と記したのだ。これを受けて文部省は1989年告示の新学習指導要領において国際理解を目玉の一つとしている。この指導要領で文部省は、外国語科目の記述に「外国語で積極的にコミュニケーションを図る態度を育て、国際理解の基礎を培う」という1文を挿入したのみならず、他の教科の記述でも国際理解推進に言及している。

その後、公・私立を問わず、多くの学校関係者によって国際理解教育の研究が進められ、また外国の学校との交換留学やスポーツ交流などの実践例が発表されるようになり、「日本国際理解教育学会」なるものも組織された。そして2002年からの新教育課程では外国語が選択科目から必修に戻されることとなった。

このような動きを私は喜ぶものであるが、「やっとここまで来たか」との感慨を禁じ得ない。1951年にアメリカの心理学者ドリス・アレン博士によって提唱されたCISV運動は、前年に発表されたユネスコの提言とおそらく根底で繋がっており、上述した日本の国際理解教育を先取りしていたように、私には感じられるからである。

CISVは、故渥美氏が生前心を注いだ国際的なボランティア活動である。1996年度の財団年報に渥美理事長が書いておられるように、CISVの趣旨に賛同された渥美ご夫妻は、1961年の夏、イギリス北部のアニックカスルで開催された「CISV子ども村」にご長男直紀氏を送り出された。当時大学生だった私は、直紀さんを含む日本の代表、4名の11歳の子供の引率者として参加した。古いお城を会場に開催された「子ども村」は、生活習慣も、言葉も、肌の色も違う10か国から集まった11歳の子供たちにとって、毎日の生活が国際理解教育そのものであった。直紀さんと共にこの子ども村に参加した小島孝子さんが書いた日記には、CISVの精神とその国際理解教育の何たるかを窺わせる記述が至る所にある。その中から二つ紹介しよう。・・・「身ぶり手ぶり、それでもわからない時は紙に絵をかいて質問を続けた。それによって思ったより沢山の事を知る事が出来た。(英語が通じない時)」、「みんな自国語で、自分のチームを応援した。こういうことは日本の子供も外国の子供も同じだ(4チームに分かれてリレーした時)」・・・。

孝子さんは後に引率者として参加したCISVキャンプで出会ったデンマークの方と結婚し、現在では両国の懸け橋として国際的な活躍をしている。様々なCISV活動を通じて育まれた国際性が、現在の孝子さんの強いバックボーンになっているとは、彼女自身の言葉でもある。引率者、あるいは日本の「子ども村」の運営に携わった経験しかない私にとっても、CISVは国際理解の何であるかを身をもって学び得た貴重な機会であったと、改めて感じる。

21世紀を迎え、国際社会で活躍する人材を育てるために、学校教育のみならず、CISVや渥美国際交流奨学財団のような民間の国際団体の活躍も一層その意義を増している。(成城学園高校教諭)